

# 八重山の明和大津波 (1771)

日本近海での歴史上最大級津波災害

# 明和八(1771)年八重山列島で地震発生、 遡上高85.4 mの津波が押し寄せた

明和8年(西暦1771年)旧暦の3月10日午前8時頃に、八重山列島東方沖で地震が突然発生、津波の遡上高は最大85.4mに達した。石垣島での被害は多大であった。死者8,335名、海水に洗われた総面積は8,000町歩、石垣島総面積の40%に達したと言われている。さらに、宮古島などの島々でも被害を出し、当時の人口が2万9千人であるのに対し、犠牲者は9千名を越えた。わが国災害歴史上、最大規模の災害をもたらしたことになる

# 4月24日は 明和大津波遭難者慰霊祭の日

1771(明和8)年4月24日午前8時ごろ、石垣島南東40<sup>キロ</sup>の海上でM7・4の地震が起きた。その地震によって発生した大津波は石垣島を中心に八重山群島、宮古群島のほか久米島まで襲い、八重山では全人口の約半分の9313人(宮古は2548人)が死亡、八つの村が全壊、七つの村が半壊するなどの未曾有の大災害となった。(八重山毎日新聞)

## 明和の大津波

牧野清著『明和の大津波』によると、地震発生日時は一七七一年四月二十四日午前八時ごろ、位置は白保崎の南南東約四十<sup>キロ</sup>の海底で規模はM7・4。それに起因して石垣島を巨大津波が襲った。

先にNHKで放映された亜熱帯総合研究所のシミュレーションによると、津波は地震発生後七分で襲来し、標高三十五<sup>メートル</sup>まで洗い流したとしている。

しかし、牧野氏が古記録に基づき実地踏査して著した『明和の大津波』によると、白保と宮良の中間にある嘉崎浜一帯から侵入した津波は、牧中の頂上近く八十五・四<sup>メートル</sup>地点まで到達し、島周辺の低地に所在する住宅や田畑をことごとく飲み込んだと記す。

古記録は、津波襲来直後の被害を克明に調査して琉球王府に報告した写本であることから信ぴょう性は極めて高いと思われる。それによると、被害面積は島の四〇%に及び多くの集落が壊滅。死者は八重山群島で人口の三割に当たる九千三百十三人に達した。

これまで明和の大津波の被害状況を誇大視する向きもあったようだが、今回のインド洋津波の実像を見ると、明和の大津波もほぼ同様な惨状を呈したであろうことが容易に推察し得る。(八重山毎日新聞 2005年 1月22日(土))



# 津波は南南東から 引き波でやってきた



津波発生から10分



10~20分



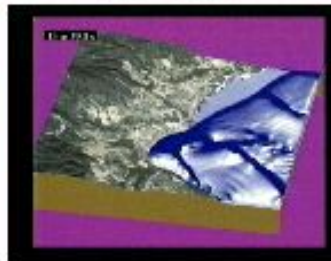
20~30分



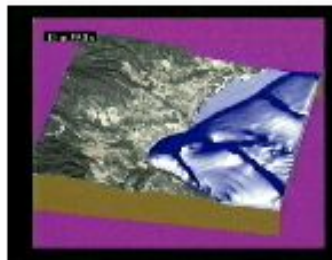
伊野田地区での津波  
11分49秒~12分49秒



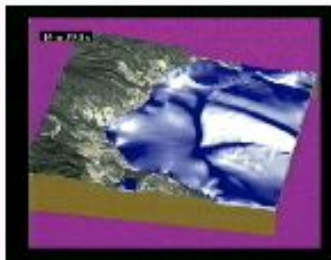
12分49秒~13分49秒



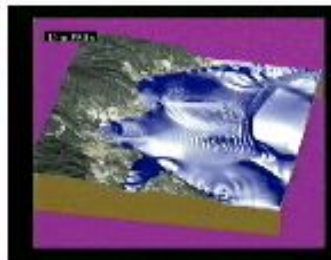
13分49秒~14分49秒



14分49秒~15分49秒



15分49秒~16分49秒



16分49秒~17分49秒

震源から石垣島  
まで約40Km

津波第1波到達  
まで7分

津波は第3波ま  
で押し寄せた

平成11年度内閣府委託事業「亜熱帯特性推  
進研究事業－津波災害研究に関する研究プロ  
ジェクトの可能性調査－」

企画制作:財団法人亜熱帯総合研究所

・製作監修:東北大学工学研究災害制御センター

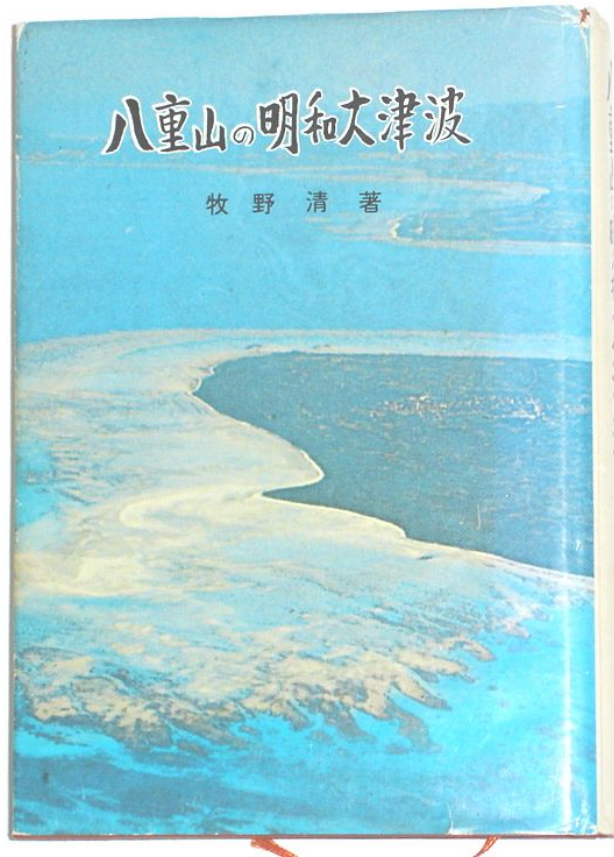
・津波計算指導:東北大学 今村文彦 教授

・資料提供:琉球大学 河名俊男 教授

・CG作成:鹿島技研 先端技術研究部

# 「八重山の明和大津波」

石垣島の郷土史家による詳細な津波記録



この本は、「レアックス石井文庫」に  
収蔵されています。



著者：牧野清氏

## 著者略歴

明治43年 石垣島に生まれる

昭和7年 台北私立成淵学校別科卒業

台湾総督府文官普通試験合格

昭和14年 台湾総督府属任官

昭和16年 台湾石炭統制株式会社入社

昭和28年 石垣市総務課長

昭和41年 石垣市助役

# 古文書による記録

## 明和津波に関する古記録



明和津波に関する当時の記録は、この大波之時各村之形行書（おおなみのときかくむらのなりゆきしよ）と下の大波揚候次第（おおなみあがりそうろうしだい）の二つである。この記録は重複している部分もあるが、合せてはじめて全群島の完全な災害報告書となる。現在では虫害がひどく、すでに読めなくなっている文字もある。この八重山の明和津波の末尾には、その原文に振仮名を附してのせてある。

(八重山郷土史研究室喜舎場永向先生所蔵)



明和大津波に関する古文書として

『大波之時各村之形行書（おおなみのときのかくむらのなりゆきしよ）』と

『大波揚候次第（おおなみあがりそうろうしだい）』が残されている

# 古文書による記録

## 『大波之時各村之形行(ナヰキ)書』

◎八重山の明和大津波の詳細な報告は、蔵元[行政庁]より琉球王府に提出された『大波之時各村之形行(ナヰキ)書』に記されている。

地震の発生時には震源海域で黒雲が沸き上がったとも赤い高波が上がって砕けたとも言われている。そして雷鳴が聞こえ、海岸では遠くまで潮が引いて魚拾いをする人もいた。やがて雲のような高い波が押し寄せて来た。震源に正対した石垣島の嘉崎浜から突入した津波は宮良台地の牧中(88,7m)で85,4mの高さに達した。宮古島でも36mの津波が押し寄せた。珊瑚礁があるために竹富島では津波が弱まったが、石垣島や宮古島では珊瑚礁が打ち破られて珊瑚の付着した津波石(MAX:700t)が海岸深く打ち上げられた。

最も悲惨なことは、津波によって田畑は疲弊し、家畜等の死骸から疫痢やマリアの伝染病が流行して、2万9千の八重山の人口が約100年後の明治には1万人程度にまで減ってしまったことである。このことには島津藩の琉球王府支配による重税[人頭税]も影響しているという。

## 大波之時各村之形行書

### 大波揚候次第

一、八重山島之儀惣頭男女式万八千九百九拾式人罷居候 処乾隆三十六年三月十日辛亥五ツ時分大地震有之右地震相止 則東方鳴神ノ様轟キ間モ無ク外ノ瀬迄潮干所々潮群立右潮一ツ打合以之外東北東南ニ大波黒雲ノ様翻立一時ニ村々へ三度迄寄揚潮揚高 貳拾八丈或 貳拾丈或 貳拾五・六丈或 貳・参丈 沖ノ石陸へ寄揚陸ノ石並大木根乍被引流 石垣登野城 大川 新川 四ヶ村 宮古御嶽前並坂下り東西村長通被引流 蔵元並役座 役座

# 津波石が打上げられた

津波が来襲した島々には、津波石が海岸から内陸深くまで多数分布している。津波の遡上高について今村(1938)は、単位が一桁間違っただと否定的見解を示した。これに対し牧野(1981)は、古文書と津波石の分布から肯定的見解を示し、この津波の大きさを強調した。

一方、加藤(1983)は、石垣島の津波石のうち、宮良湾内に点在する岩塊を除いて、多くのものは周辺の更新世隆起石灰岩からの転石であると考えている。

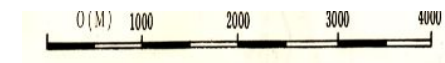


左上:津波大石(つなみうふいし)、推定700トン:大浜崎公園

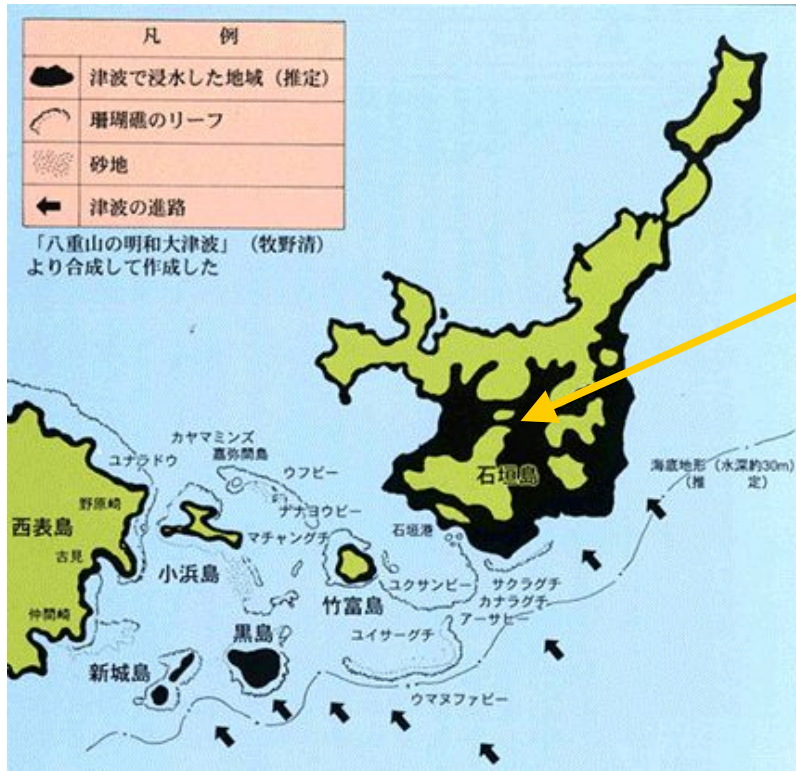
右上:津波による大石:平久保半島、平久保牧場内

左下:津波で打上げられた1m以上のシャコ貝:八重山観光ホテル

# 石垣島の津波石の分布は、 4km内陸まで及ぶ



# 明和大津波の遡上高は85.4m



津波は島の鞍部(85.4m)を乗り越え、名蔵湾に流れ込んだ

沖縄総合事務局石垣港湾事務所  
ホームページ資料

津波は石垣島においては、旧暦3月10日五ツ時分(午後8時)頃宮良村海岸より上陸し、島の中央部から南側にかけての田畑、家屋、人畜を飲み込みながら、名蔵方面へと通り抜けました。津波の最大の高さは現在の宮良牧中において28丈2尺(標高約85メートル)と推定されていますが、宮良川や磯部川、轟川などに沿って一挙に島の奥まで進入し、中央部で急速に増幅して想像を絶する奔流となり、ちょうど島を取り巻く海岸の岩の塊が陸上に押し上げられ、濁流とともに島の中央部まで運ばれました。その痕跡が現在まであちこちに残っています。

同時期に黒島、新城島などでは島全体が大波で洗われ、宮古島、多良間島などでも大きな被害が出ました。

# 明和大津波の特徴

- 津波の前駆現象—激しい地震、東方に雷鳴のような轟音、異常な干潮現象
- 津波の状況---石垣島の**40%**が潮に浸かる。河川に沿って深部に浸入し、鞍部を西に越流した。サンゴ礁がバリアになって被害を小さくした(竹富島など)。大量に打上げられた津波石とシャコ貝。
- 津波被害---群島人口の**32%**(9313人)を失う。完全に流失した村-8村、部分流失-7村。
- 津波による変貌---凹凸した海岸線が流出土砂で埋め立てられた。
- 津波の後の社会現象---**80**年間にわたる飢饉、疫痢、マラリアの発生と人口減少。吸血赤蠅の大発生による牛馬斃死。耕作地の流亡による食料減産。人頭税による圧政の歴史と減免措置。

# 与那覇在番が津波復興に功績

与那覇親雲上朝起は安政六年(1777)年、八重山在番に任ぜられ、津波後7年の八重山の復興に尽くした

与那覇節(ゆなはぶし)

一、与那覇主ぬ御蔭に  
主ぬ前ぬみぶぎんに

二、昔世ばたぼつられ  
神ぬ世ばたぼつられ

三、主ぬ前ゆ 仰ぎ  
百果報どうてずる

四、百年世ぬ御願  
百歳世ぬ御願

五、五日まあり十日越ぬ  
夜雨ばたぼつられ

与那覇在番のおかけさまで、  
与那覇在番のおめぐみによって

豊年満作の年を迎えました  
満ち足りた平和な年をむかえました

在番の御徳を仰ぎつつ、合掌して、さらに沢山の幸せが  
くるように祈っております

いつまでもこの豊かな年が続きますようにと、お願いして  
おります。

いつまでもこの黄金世が続きますようにと、お祈りしております。

五日ごとに風を吹かせていただき、十日ごとに夜雨を降らせていただいて  
たいへんありがたいことです。

## 参考文献紹介

- ・牧野 清(1968): 八重山の明和大津波, 著者出版  
\* 本資料の多くの部分はこの著作からの引用です。
- ・加藤 祐三(1986): 八重山地震津波(1771)の津波の遡上高. 歴史地震, 2
- ・中田 高・河名 俊男(1986): 明和8年(1771)の地震津波について. 歴史地震, 2.
- ・河名 俊男・中田 高(1987): 明和津波と海底地殻変動. 歴史地震, 3